

第1章 宮田村の景観の特徴と景観計画の目標

1-1 宮田村の景観の特徴

「中央アルプス駒ヶ岳に抱かれ、東に南アルプスを望む私たちの宮田村は、豊かな自然に恵まれた概ね半径2キロメートルの中で暮らし、村民同士のつながりが深く、顔の見えるコンパクトな村として発展してきました。」

宮田村むらづくり基本条例の前文にこう記された村の特徴は、毎日の暮らしのなかで目にする景観に端的に表れています。

まずは、朝夕、四季折々に表情を変えながらもいつもそこに見えるアルプスの山並。その手前に緑の山々や段丘の樹林が暮らしの場を包むように連なります。そこから手入れの行き届いた耕作地が広がり、さらにその中に島のように集落や家並が浮び、なだらかな傾斜の先には天竜川が滔々と流れています。大自然と身近な里山に守られたコンパクトな広がりの中で、人々の暮らしが息づいている。こうしたイメージを彷彿とさせる眺めが、宮田村を代表する景観といえましょう。明るい伊那谷のなかにあっても、宮田村はその暮らしの場の範囲が目に見える自然地形によってはっきりと区切られているために、村のまとまりとコンパクトな印象を高めています。

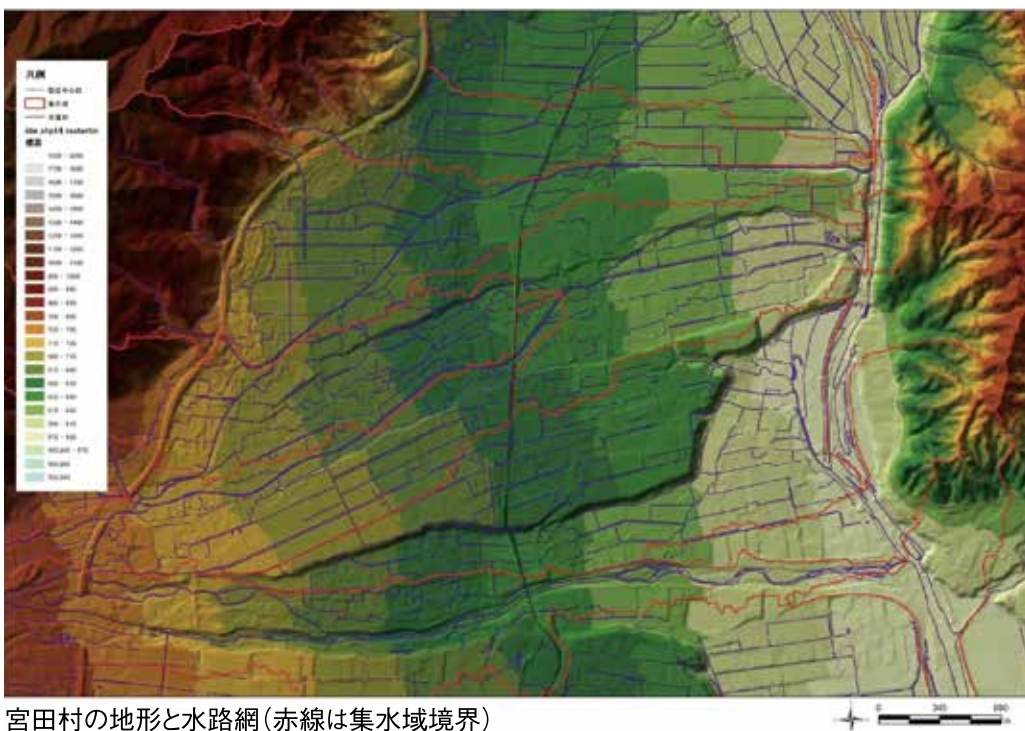


宮田村の顔となる眺めとしてホームページに使われている画像

そしてこのコンパクトなまとまりのなかに、土地の状況を丁寧によみとった人々の暮らしが蓄積されてきました。その歴史はおよそ一万年前にさかのぼります。宮田村文化財マップに記された遺跡や文化財の分布は、段丘やわずかな起伏の上に居住し、平地部を生産地としてきたことを見事に表しています。こうした暮らし方は水と深く関わっています。駒ヶ岳から流れ出る水の恵みを暮らしに活かすことが、古代から現在まで、宮田村の産業を支えています。西山から平地に注ぐ水の流れは、網の目のように張り巡らされた水路に導かれ、それが支える広々とした水田の景観をつくっています。



宮田村文化財マップ(部分)には地形と遺跡の関係が明確に表れている



宮田村の地形と水路網(赤線は集水域境界)



大田切入山論裁許絵図1727年
(宮田村インターネット博物館より)



宮田村部分古絵図(部分)1830年頃
(宮田村インターネット博物館より)

一方南北の人の移動によって築かれてきたのが、宮田宿の町並みです。伊那谷を往き来する人々の拠点としても宮田村は重要な位置づけにありました。現代では国道153号や広域農道などの幹線道路からの眺めが、最も多くの人が目にする宮田村の景観といえましょう。JR飯田線の車窓からも、建ち並ぶ家々とのびやかな視界の広がりの変化を楽しむことができます。



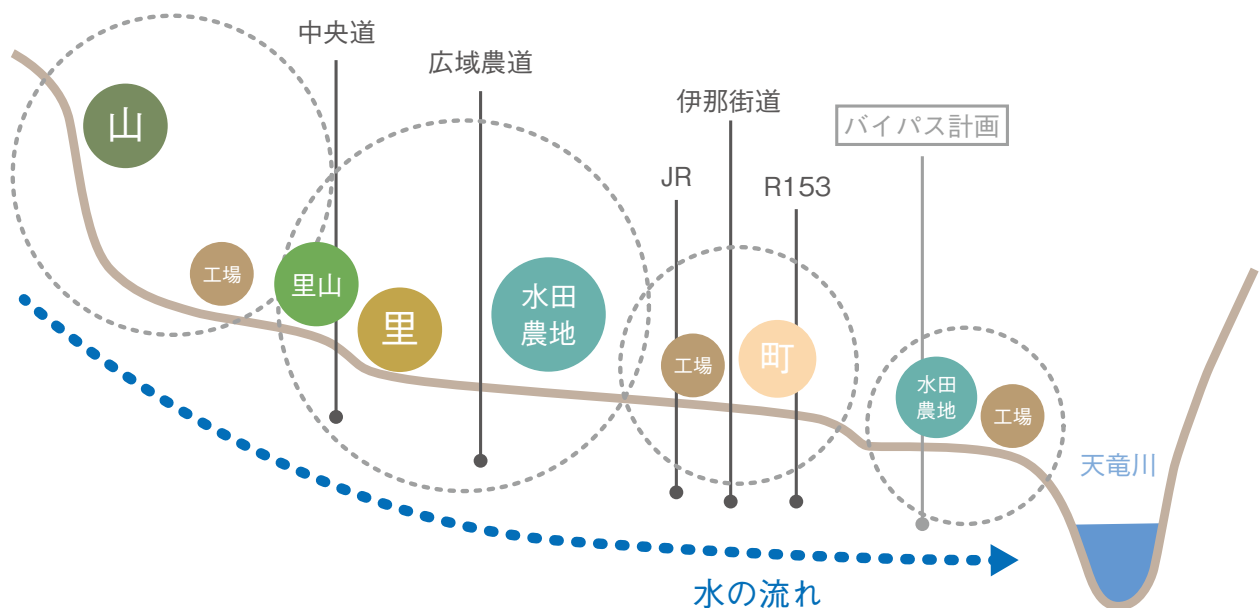
南北の交通動線上の眺めと古くからの集落の眺め

以上のように、世界でここにしかない地形と自然環境の上に何千年にわたって築かれてきた暮らしの蓄積が、ふるさと宮田の最も基本的な景観の特徴となっています。

この基本的な特徴の上に、日々の人々の生活によって磨き込まれた景観がさらに展開しています。



宮田村の主な交通動線(南北:広域 東西:村内)



地形と水の流れ、土地利用・交通からなる宮田村の骨格構造

コミュニティのなかで永年にわたって継承されてきた住まい方によって、自ずと形成された魅力的な町並み。

立派な蔵が醸し出す風格。

手入れの行き届いた庭木や水路。

丁寧に耕作された農地。

農作業に精を出す人々。

大樹とともにある寺社。

祭りの賑わい。

辻にならぶ石碑。

集落を見守る火の見櫓。

地域にとけ込んだ工場と働く人の活気。

元気な子どもたちの声が響く保育園や学校。

店主の個性が光る店構え。道沿いに植えられた花々。

道や水路を掃除し、庭の手入れをする人々。

スポーツによる交流と賑わい。

あいさつを交わす人たち。

こうした村民同士のつながりの深さがつくり出す様々な眺め、つまりコミュニティの景観が、宮田村の景観のもう一つの特徴です。



人々の暮らしとコミュニティがつくる眺め

すなわち、地形をはじめとする自然環境と歴史と人々の暮らしの蓄積がつくる、ゆるぎなき宮田村の基本的景観と、互いを気遣うコミュニティの景観、この二つがともに響き合っていることが、ふるさと宮田村の景観の特徴です。

● コラム

風景と景観

風景と景観は、似た言葉ですが、その語感には違いがあります。宮田村で目にする山々や田んぼ、集落の家並み、あるいは祭りの賑わいなどを思い浮かべた時、それは「景観」というよりも「風景」というほうがしっくりくる方が多いかと思われます。日本語としても「風景」は古くからあったのに対して、「景観」は明治時代に外来の専門用語の訳語として誕生しました。そのこともあり、「景観」は行政や専門の世界で使われて、人や心情との関わりを排除した言葉というイメージを持たれることも少なくありません。

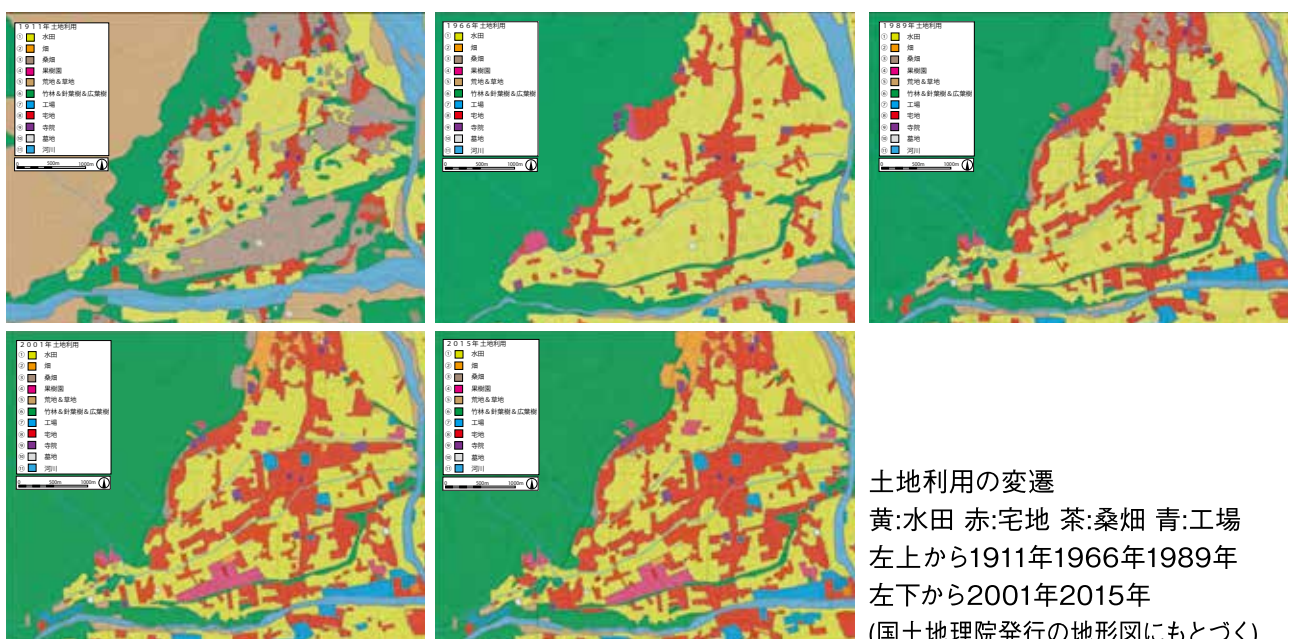
宮田村の景観計画は、宮田村を我がふるさとと感じ、大切にすることを育むことを目指しています。そのため言葉としては人の気持ちを含んだ「風景」を使ったほうが良いかもしれません。しかし、景観にも人の意味合いは含まれていますし、本計画は「景観法」に基づくものであるため、「景観」に統一して表記しました。

1 - 2 宮田村の景観計画の目標

1-1に述べた景観の特徴を維持、継承し、磨いていくことによって、宮田村を我がふるさとと感じ、大切に作る心を育むことができます。これこそが、宮田村の景観計画の意義であり、究極の目標です。景観に対する取り組みを特に行わなくても宮田村の景観はこれまでなんとか継承されてきました。しかし、人口減少、農業の担い手不足、新たな大規模道路計画など、社会と空間が大きく変化しつつあるなかで、宮田村の景観の特徴が大きく揺らいでいくことが危惧されます。そのため、これからは意識的に景観の価値を考え、景観づくりに取り組んでいく必要があります。

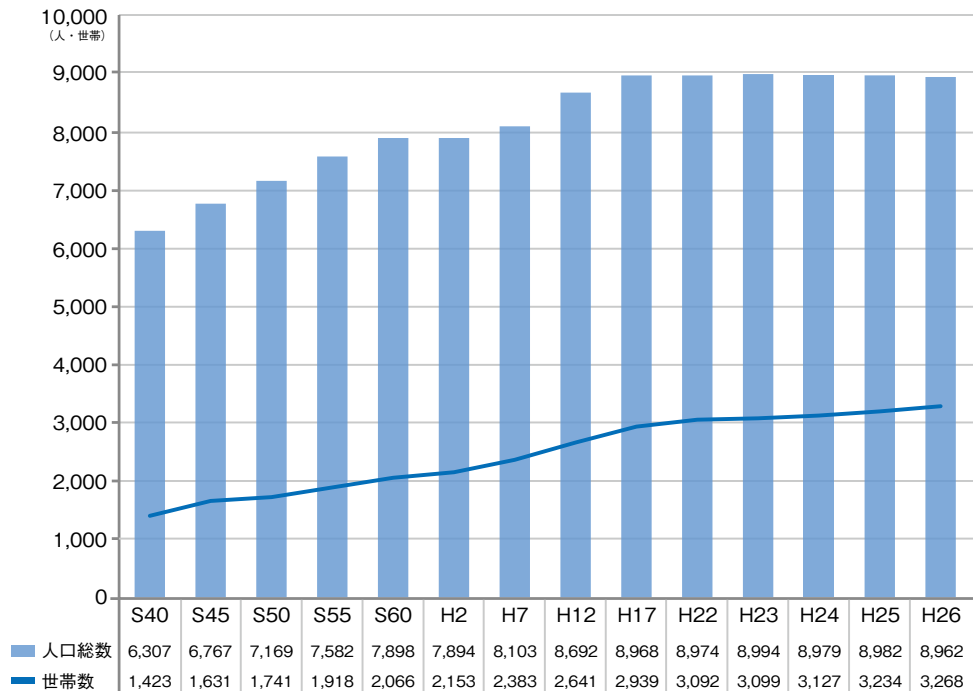
また、宮田村の景観の特徴は、地形や自然環境に適合した暮らしの蓄積によって形成されたものであり、何千年もの歴史を生き延びてきた極めて持続性の高いものです。気候変動やエネルギー問題など、世界的な規模で展開する環境変化を考えたときに、自然環境を活かした持続的な暮らしの手本としても尊重されるべきものでしょう。特に水を活かした産業、暮らしの豊かさは、宮田村の大きな利点となります。移住、定住を促進し、地域に根ざした持続的な産業を育成するためにも、宮田村の基本的景観を維持、継承していくことが求められます。

同時に、コミュニティによって育まれる景観も、移住、定住、交流や観光の促進において、宮田村が発信できる大きな魅力です。宮田村の人々が日々の生活のなかで育んできた町並みや田園の景



観を新たな人々とも共有することで、コミュニティ自体も持続します。

以上のような考え方にに基づき、宮田村の景観計画の目標を、宮田村の景観の特徴である「自然と歴史と人々の暮らしの蓄積によって形成された基本的景観と、コミュニティによって育まれる景観を、ともに維持、継承し、さらに磨いていくこと」とします。



宮田村の人口と世帯数の推移(「宮田村人口ビジョン」より)



移住定住促進のための情報を提供する宮田村のホームページの画面(部分)

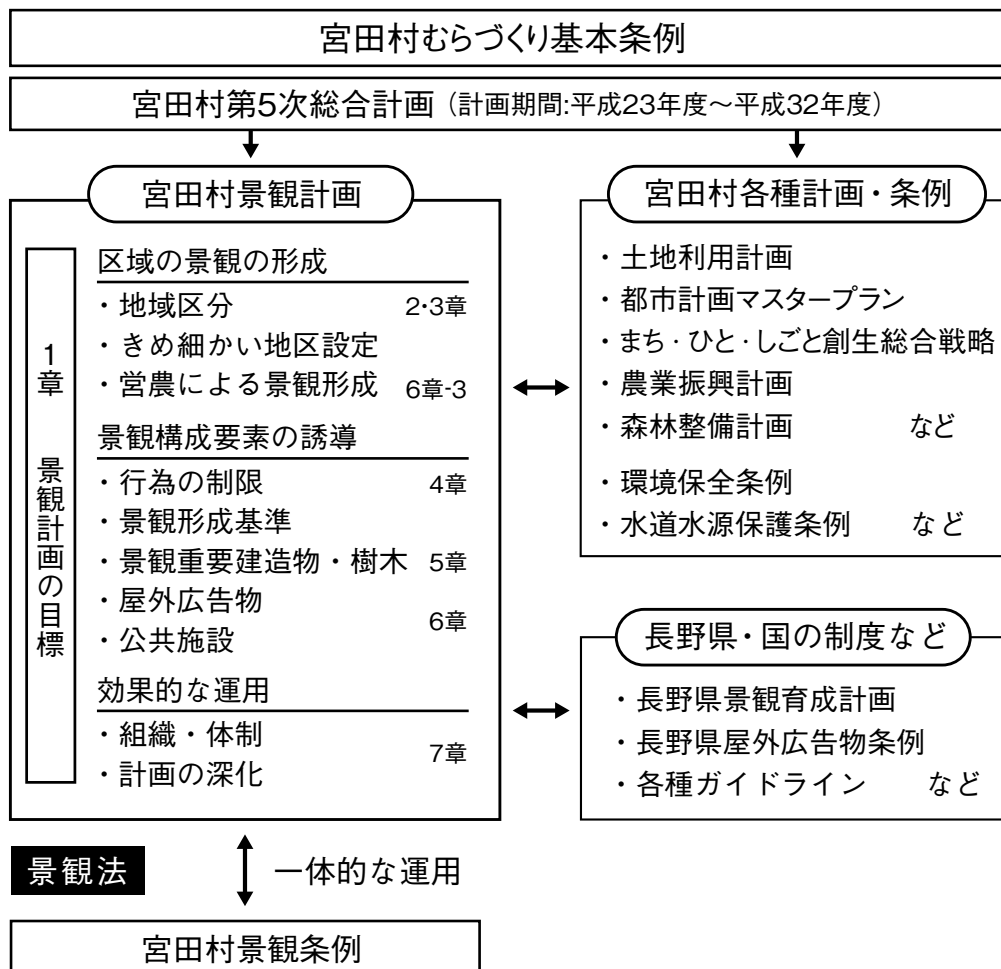
そのための取り組みを本景観計画で示します。これまで宮田村には景観づくりを直接的な目的とした体系的な計画や条例はありませんでした。そこでこれからは、平成16年に制定された景観

法に基づき、そこに示された仕組みを使っていくことで、実効力のある景観づくりに取り組みます。その際には、コンパクトで規模の小さい自治体であるからこそ可能な、丁寧できめ細かい計画と運用を目指します。

さらには、景観づくりをむらづくりの重要な取り組みと位置づけて、宮田村むらづくり基本条例の主旨と内容に沿った計画とします。

また、宮田村の景観の特徴は、産業や暮らしの結果として現れているものであることから、様々なむらづくり施策や地域自治として実践される諸活動との連携を図り、それらの成果が目に見える景観の成果に結びつくよう工夫していきます。

以上のような目標と取り組み姿勢を広く共有することで、宮田村ならではの景観づくりを推進していきます。



宮田村の景観計画の位置付けと構成